



このイースターバックは100回も使用でき、特殊な折りたたみ方でコンパクトに収納できる

# スターウェイ

## 100回使える梱包箱を開発し、循環型の物流サービスを展開



相次ぐ「賞」の受賞で  
問い合わせが急増

「賞を頂いてから、状況は一変しました。その反響が大きくて、問い合わせも急激に増えました」

こう話すのはスターウェイの竹本直文社長だ。同社は平成18年に東京商工会議所の「第4回勇氣ある経営大賞」優秀賞、「第3回エコプロダクツ大賞」エコサービス部門で経済産業大臣賞を相次いで受賞した。特にエコプロダクツ大賞での受賞は、環境問題に取り組んでいる

企業の関心を呼び、竹本社長に詳しく話を聞かせてほしいとなったのである。「最近海外からも話が来ている」という。その受賞対象はリユ

ス・リサイクル可能な梱包箱「イースターバック」と、それを利用した循環型物流サービス「環境デリバリーパック」の提供。イースターバックは何度でも復活するという意味を込めて名付けられ、100回も再利用が可能な梱包箱だ。その上、使えなくなったら、溶かしてもう一度同じ箱をつくることできる。

製紙業界大手の北越製紙と独占製造権契約を結んでつくっているもので、100%再生紙の強化素材「パスコ」が原料だ。特殊な段ボール箱と言えは、イメージしやすいかもしれない。箱の種類も豊富で、弁当箱程度の大きさからPOSレジが収まるほどの大型のものまである。

製品をこの箱に入れて運ぶわけだが、その際に梱包する製品を特殊ウレタンフィルムのクッションでサンドイッチのように上と下から宙に浮いた状態で挟み込むことで、外部からの衝撃を吸収するようにした。この特殊フィルムは収縮率が70%もあり、伸ばしてもすぐ

に戻り性質を持ち、とがったもので突き刺してもまず破れることがない。そのため、どんな形状のものでも無理なく固定することができる。これにより発泡スチロールなどの緩衝材もいらなくなる。イースターバックを利用すれば、段ボールと発泡スチロールの両方を使用することなく、梱包資材にかかるコストと廃棄処理費用も大幅に下げられる。



竹本直文 代表取締役社長

ちなみに、この箱の特長は頑丈ということだけでなく、コンパクトに折りたたむことも可能で、元の箱の中に同じ大きさの箱が14枚も収納できる。普通、段ボール箱を箱に詰める場合、一回り大きい箱に入れる必要があるが、イースターバックは同じ箱に入れられる。これは折り方に秘密があるが、それによって、収納性や作業の効率性も格段にアップさせることができた。

しかし、このように優れた製品

### 梱包資材にかかるコストが55%も削減した企業も

しかし、このように優れた製品

であつても、当初はなかなか購入する企業が現れなかった。というのも、イースターバックは通常の段ボールの数十倍の値段だったからだ。しかも、イースターバックを活用するには、独自の組み立て方を習得する必要や、届け先から回収する流通システムが必要である。そのため、竹本社長が営業に訪れても企業の反応は今ひとつだった。

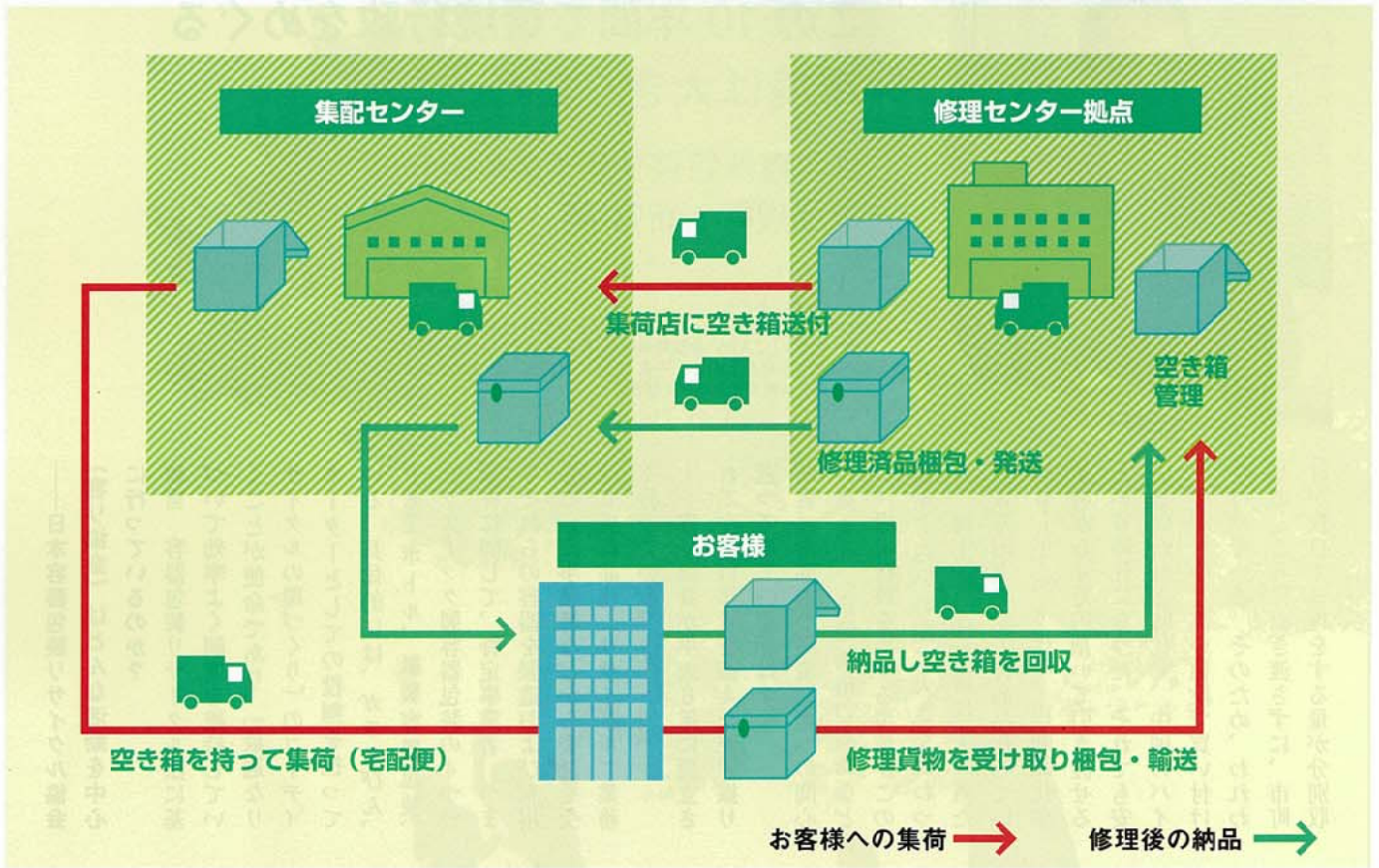
「それならイースターバックを単体で売るのでなく、梱包作業・配送・回収という一連の物流を含めた総合サービスとして提供したらどうだろうか」と考え、「環境デリバリーパック」を始めました。お客様から見ても、これなら利用しやすいし、ゴミも出ないでしょう」と竹本社長は話す。

そして、ICタグの一種「RFID」をイースターバックに組み込んだ。これによって、「荷物はどこにあるか」「どこから来て、何回使われたか」といった情報が分かるようになり、同社がインターネット上で一元管理することにした。

この結果、イースターバックを活用した環境デリバリーパックは話題を呼び、徐々に導入する企業が増えていった。そんな中、相次いで賞を受賞し、一気に人気を呼ぶこととなった。

今や企業は環境への意識の高まりを受け、ゴミや二酸化炭素の排出削減に真剣に取り組まざるを得

リペア・メンテナンスシステムモデル



ない。そんなことも環境デリバリーパックの導入に火を付けているわけだが、その背景にはコスト削減効果が抜群だということも挙げられる。

例えば、ある大手プリンターメーカーでは梱包資材にかかるコストを55%も削減できたそうだ。その上、コスト削減がそのまま環境保護にもつながる。また富士ゼロックスは、平成22年までの二酸化炭素削減目標の30%を、この環境デリバリーパックで実現しようと考えている。

一般消費者にとっても、家電製品やコンピューター関連商品が届くたびに、梱包された箱が増えていき、置く場所に困っている人も少なくない。処分するのも手間だし、また故障した場合、梱包する箱がないと困ることがある。それが、中身だけ置いていってもらえると、助かると思う人も多いに違いない。

「ゴミを出さない仕組みというのは単独ではできない。ですから、いろいろな人や企業を巻き込んで循環型の社会をつくりたい。日本からゴミを出さないようにするには、日本の企業と組まないといけないですね」と笑顔で語った。

その根本にあるのは「もったいない」という考え方である。竹本社長はその言葉を若いときから使っている。スターウェイを設立したのも、そこから来ている。

**会社データ**

社名	スターウェイ株式会社
住所	東京都港区浜松町1-18-13
電話	03-5408-1311 (代)
代表者	竹本直文 代表取締役社長
設立	平成11年
資本金	3億5030万円
売上高	13億円 (平成18年度)
従業員	14人

チップを納品する際に使用されるトレイが大量に廃棄されていた。その数は月に30万枚にもなり、「何と無駄の多い環境に悪い業界なんだ」と常々感じていたという。無駄はトレイばかりでなく、部品や消費者向けの商品を梱包する段ボールも、その都度廃棄されていた。

そこで、半導体業界の無駄を省こうという目的でスターウェイを平成11年に設立した。しかし、半導体工場が海外へ移転してしまい、なかなかトレイが集まらなくなった。これに代わるものをつくることで、イースターパックをつくったのである。

「大企業が環境に取り組み始めたから、その大企業にかかわっている中小企業も環境に取り組みざるを得ない。それに対して、われわれの仕組み、サービスが役立てばいいです」と竹本社長は話す。

今後、スターウェイの「環境デリバリーパック」はますます注目されることになりそうだ。